

第二六回大会案内特集

第二六回大会シンポジウム

「水産物の需要・消費問題」

長谷川 彰

二百海里時代という大転換期を迎えて、水産物需要の動向が改めて大きな問題になっている。外国沿岸二百海里水域での日本漁船の漁獲減少を「水産食糧危機」に結び付ける論説は、最近ではさすがに影を潜め、代わって水産物供給の過剰化あるいは需要の減退による需給バランスの崩壊という正反対の「危機論」すら現れるようになった。事実、カツオやマグロ等の価格暴落、マイワシの豊漁と低位な食用化率、といった諸現象が、二百海里体制化当初の一般の予想とは正反対のかたちで出現している。

こうした状況の下で、水産物需要およびその実体をなす消費過程にまで立ち入った調査や分析が、かなりの研究者によって行われている。他の分野と比較した場合、際立って業績の多い研究分野であると言えると思うが、

いろいろの角度から論じられている諸見解を動員して、水産物の需要と消費の全体像を把握する学会としての作業は、まだ行われていない。現下の社会的要請ということもあるが、研究を現水準以上に引き上げるためにも、共同の討論が必要な段階にきていると言えるであろう。「流通問題」の第二回目のテーマとして、「需要・消費問題」をとりあげた理由である。

なお、この問題を全体的に討論するために、次に挙げる四つの側面について報告してもらうことにした。以下、それぞれの論点を各報告者に述べてもらっているが、それらをベースにして、シンポジウムがより高次の認識へ到達することを期待したい。

(1) 水産物消費・需要変化の諸要因

報告者 長谷川 彰

特に高度成長期を通じて急速に進んだ水産物消費の変化について、いろいろの特徴づけがなされている。いわく「高級化」「多様化」「簡素化」等々であり、それらを規定する要因として、「所得水準の上昇」と「生活様式の変化」が指摘されるのが普通である。「簡便化」はともかく、「高級化」や「多様化」が「所得水準の上昇」や「生活様式の変化」と単線的に連結して論じられる時、現下の水産物消費の変化は「食生活の高度化」を意味し、人間欲望の自然的必然性に根ざしているかのごとくである。しかし奇妙なことに、その食生活あるいは食文化そのものを対象とする研究者が、むしろ逆に、高度成長期以降

の変化を、「食文化の崩壊」あるいは「食事の単調化」として、否定的に評価しているのを見るのである。前者が、エコミストによる商品購入の段階（つまり商品需要の面）での特徴づけであるのに対し、後者は食物の最終的な摂取の在り方（つまり消費そのもの）を問題にしているところに両者の違いがあると考えられ、それらを相互に関連づけるものとして、一般に「生活様式の変化」として概括されているものを、内容的に解析してみることの必要性が示唆されるのである。

水産物消費、需要に関する既往の諸見解と論点を整理した上で、特に右の視点からできるだけ実証的に問題を掘り下げてみたい。

(2) 農村における水産物消費構造の変化

報告者 福屋敬宣

嘗って水産研究会が、農村における水産物の需要・消費について調査して以来、高度経済成長期を経過することによって、農村そのものが著しく変貌を遂げた。農村はもはやない、とまでいわれる程である。他方この間に、水産物流通のネットワークは農村部に向けて諸種の漸進な拡張をみせ、ようやく定着して来ている。

こうした状況に対しての検討を代表するものは、『農家の食料消費構造の変化に関する

調査分析』（食生活研究会編・昭和五二年刊、四七四頁）であろう。この報告書においても水産物の消費構造については今一步の感がある。そこで、今日の農村における水産物流通のネットワークの変化を一つの軸に、その消費の主体である農家の消費生活の変化を他の軸にとり、農村の水産物消費のあり方と、それを実現する構造を検討する。

(3) 都市における生鮮水産物の消費構造 ——業務消費と一般消費の変化とその 促進・抑制要因を中心に——

報告者 倉田 亨

「魚離れ」現象は、消費者モニターに対する世帯単位の消費調査結果からという限定でみなければならぬ。この場合も、都市消費者世帯そのものの変化が進行しているならば、たとえ個人単位消費でみれば変らなくとも、世帯単位の「魚離れ」現象はおこりうる。同一个人の場合でも、年令によって食嗜好・消費に変化を伴うことは否めない。とすれば、総理府統計の対象家族の年令構成の変化などが効いて来る筈である。また外食の場合に調理品を十分に原料分けて調査されているわけではない。こうした点を今一步切り込んで「魚離れ」現象と映る値を洗い直す必要がある。

なかでも、業務用消費についてはこれまで等閑のままであった。これの消費実態を明かすことは消費にとどまらず、都市水産物流通全体を考える上でも重要な意味を持っている。以上の諸点を念頭に、一般消費と業務消費についての今一步踏み込んだ説明を図りたい。

(4) 水産物の需要・消費構造の変動 と漁業構造に及ぼす影響 ——畜産物との競合——

報告者 平沢 豊

二〇〇海里元年に魚価高と魚離れが起ったが、これは構造的な問題として把握すべき問題である。動物性蛋白の摂取量が天井に近づいてきた現在、畜産物の供給増加は、水産物の需要構造に大きな変化をもたらす。本報告では欧米の主要漁業国の動物性蛋白質の需要の動向と水産物の利用の変化、漁業構造の変化を概観しつつ、わが国の漁業構造の変化についてふれてみたい。要約すれば、現状のままに推移するならば、欧米主要漁業国のたどった道、ミール生産的漁業と養殖業に特化していく方向である。かくて、この方向をとらないためにはどうあらねばならないという資源管理型漁業への路線が出てくる。

一、会場 浜名荘

電話 ○五三五九—二—〇六六八

（東海道線）
弁天島駅下車徒歩

一五分
タクシー三分

午後四時—六時

全国理事会

◎六月一日（金）午前九時三〇分／

シンポジウム

「水産物の需要・消費問題」

◎六月二日（土）午前九時三〇分／

一般報告

総会（午後一時～二時）

一般報告をなさる方は、報告要旨（四

〇〇字三枚以内ヨコ書）を五月八日

必着にて事務局までお送り下さい。

なお、配布資料は各自で五〇部ほど御

用意願います。

会場となる浜名荘へ宿泊致します。

費用は部屋代、朝・夕食および税、奉

仕料含み二泊六、〇四〇円

宿泊の件は同封のハガキにて五月八日

必着にて事務局まで申込んで下さい。

企画、編集担当常任理事を中心に、その

他理事各位の協力をあおいで行なう。

六月一日夕食を兼ねて行なう予定

会費 二、〇〇〇円

一、五〇〇円（レジメ代を含む）

△昭和五三年度ボーナス・カンパについて

会員の皆様の御協力によりまして所期の目標を達成致しました。ここに御報告申し上げます。

募金額（三月三十一日現在）一五九、〇〇〇円

募金者数	四四名
------	-----

募金者氏名（順不同）

富成幸一	倉田亨	木下哲一郎	外間源治	大島襄二	米田一二三	大喜多甫文	青野寿郎	阪本楠彦	岡伯明	近藤康男
榎彰徳	島本信夫	蓑田瑞穂	境一郎	静岡県信濃連	河野通博	堀口健治	二野瓶徳夫	服部昭	岡本信男	鶴田正裕

田中正紀 柳谷信一 木原康雄 吉木武一 田畑喜代男 西村章作 寺坂登 岩崎京至 浦城晋一 中井昭 平沢豊

鈴木明旭 桜井木 池松政 和田勉 増田洋 浜崎礼三 嘉成三郎 伊藤義勇 大海原 長谷川 高山隆三

△訂正

五三年一月「事務局短信」にて第二五回大会の模様をお知らせしましたが、その折、一般報告の部で次の報告を書き落しました。お詫びして訂正します。

魚種・漁法・生産費の関連性―産地価格の適否について― 田中正紀

△岡本清造著 漁業地代論 八、〇〇〇円

購入申込みを受付けております。事務局経由で送金して頂けばよいことになっておりますので早めに申込んで下さい。

△漁業経済研究第二四卷三・四号は大会当日参加者にはお渡しできるよう印刷中です。



「漁業経済研究」バックナンバー在庫案内



漁業經濟研究	〃	3号	300円	漁業經濟研究	19卷		
漁業經濟研究	〃	4号	300円		1,2 合併号	800円	
漁業經濟研究	15卷	1号	400円	漁業經濟研究	〃	3号	600円
漁業經濟研究	〃	2号	400円	漁業經濟研究	〃	4号	600円
漁業經濟研究	〃		円	漁業經濟研究	20卷	1号	600円
	3,4 合併号		800円	漁業經濟研究	〃	2号	600円
漁業經濟研究	16卷	1号	400円		〃		
漁業經濟研究	〃	2号	400円	漁業經濟研究	3,4 合併		800円
漁業經濟研究	〃	3号	400円	漁業經濟研究	21卷	1号	800円
漁業經濟研究	16卷	4号	400円	漁業經濟研究	〃	2号	800円
漁業經濟研究	17卷	1号	400円	漁業經濟研究	〃		
漁業經濟研究	〃	2号	400円		3,4 合併号		1,500円
漁業經濟研究	〃			漁業經濟研究	22卷	1号	1,000円
	3,4 合併号		400円	漁業經濟研究	〃	2号	1,000円
漁業經濟研究	18卷			漁業經濟研究	〃		
	1,2 合併号		1,000円		3,4 合併		1,500円
漁業經濟研究	〃	3号	500円	漁業經濟研究	23卷	1号	1,000円
漁業經濟研究	〃	4号	500円	漁業經濟研究	〃	2号	1,000円